

## 信綱研究とは何か？ 奥田亡羊

二〇一三年六月三日、『佐佐木信綱研究』創刊0号が出版された。表紙に「問題提起号」とある。二年前から研究活動を続けてきた「佐佐木信綱研究会」の研究成果をもとに、今後の信綱研究の方向を探るものだ。信綱没後五十年の節目に、信綱研究が本格的にスタートを切ったことを、まずは歴史的な出来事として受け止めたい。

この雑誌を読んでわたしは、信綱の創作について、学問について、人間について、おそらく十年後には常識となるような基本をずいぶんと教えられた。わたしは信綱についていかに何も知らないかを教えられたわけである。

だが、ひとつ言い訳しておく、たとえば信綱が生涯に何冊の本を出版したか、とても基本的なことのように思われるが、それを正確に知っている人は世界にひとりもない。信綱にはそれほど膨大な著作があるのだ。しかもそれが、歌集、歌論、古典和歌の研究書（もちろんこの中にはテキスト作りや文献発見に関するものも含まれる）、短歌実作・鑑賞の啓蒙書、アンソロジーなど、非常に多岐にわたっている。

歌人としても和歌の研究者にしても、それぞれが知っているのは信綱の全体のごく一部に過ぎない。一人では一生かかっても信綱の全貌をつかむことはできない。だからチーム研究が必要になる。その核となるのが「佐佐木信綱研究会」であり、雑誌『佐佐

木信綱研究』なのだろう。

歌人や研究者を結集したチームをしても二十年以上かかると思うが、最終的に信綱全集をまとめることができれば、そこがまた文学の新しい出発点になると思う。

では、なぜ信綱研究なのか。

答えは単純だ。信綱は日本の短歌の歴史そのものだからだ。

研究の専門化が進んでしまった今日、信綱を超えて和歌全体を語ることができる研究者はいないだろう。信綱を知ることとは短歌史の全体性を回復するということだ。

万葉集については言うに及ばない。定家と西行にしても、今では二人並び称されて当然のように受け取られているが、西行の「山家集」の校訂を行い、近世において評価の低かった西行を近代に甦らせたのは信綱その人である。和歌革新運動によって分断されているかに見える近世和歌と近代短歌をつなぐのも大隈言道をはじめとする江戸後期歌人の信綱の研究だろう。また現代において語られる近代短歌史は「アララギ」がつくったものだ。信綱研究が進めばおのずからそれとは異なる近代短歌史が浮かび上がってくる。それは現代にも通じていて、たとえば前川佐美雄と前衛短歌の関係についてはよく言及されるが、佐美雄と信綱の関係の詳細に検証すれば、前衛短歌にまた別の方向から光を当てることになるだろう。佐佐木幸綱の男歌にしても、幸綱から突然始まったのではなく、信綱から続く「心の花」の系譜の中に位置づけられるべきものである。

思いつくまま書いたが、信綱研究は日本短歌史を書き変えるプロジェクトに他ならないと、個人的にはそのように見ている。